

《詩篇 109 篇》

0 指揮者のために。ダビデの賛歌

《愛に仇をもって報いる敵対者たち》

- 1 私の賛美する神よ。黙っていないでください。
- 2 彼らは邪悪な口と、欺きの口を、私に向けて開き、偽りの舌をもって、私に語ったからです。
- 3 彼らはまた、憎しみのことばで私を取り囲み、ゆえもなく私と戦いました。
- 4 彼らは、私の愛への報いとして私をなじります。私は祈るばかりです。
- 5 彼らは、善にかえて悪を、私の愛にかえて憎しみを、私に報いました。

《代表者への報復の求め》

- 6 どうか、悪者を彼に遣わしてください。なじる者が彼の右に立つようにしてください。
- 7 彼がさばかれるとき、彼は罪ある者とされ、その祈りが罪となりますように。
- 8 彼の日はわずかとなり、彼の仕事は他人が取り、
- 9 その子らはみなしごととなり、彼の妻はやもめとなりますように。
- 10 彼の子らは、さまよい歩いて、物ごいをしますように。その荒れ果てた家から離れて、物ごいをしますように。
- 11 債権者が、彼のすべての持ち物を没収し、見知らぬ者が、その勤労の実をかすめますように。
- 12 彼には恵みを注ぐ者もなく、そのみなしごをあわれむ者もいませんように。
- 13 その子孫は断ち切れ、次の世代には彼らの名が消し去られますように。
- 14 彼の父たちの咎が、主に覚えられ、その母の罪が消し去られませぬように。
- 15 それらがいつも主の御前にあり、主が彼らの記憶を地から消されますように。
- 16 それは、彼が愛のわざを行うことに心を留めず、むしろ、悩む者、貧しい人、心ひしがれた者を追いつめ、殺そうとしたからです。
- 17 彼はまたのろうことを愛したので、それが自分に返って来ました。祝福することを喜ばなかったのも、それは彼から遠く離れました。
- 18 彼はおのれの衣のようにのろいを身にまといました。それは水のように彼の内臓へ、油のように、その骨々にしみ込みました。
- 19 それが彼の着る着物となり、いつも、締めている帯となりますように。
- 20 このことが、私をなじる者や私のたましいについて悪口を言う者への、主からの刑罰でありますように。

《敵対者たちからの救いを求める祈り》

- 21 しかし、私の主、神よ。どうかあなたは、御名のために私に優しくしてください。あなたの恵みは、まことに深いのですから、私を救い出してください。
- 22 私は悩み、そして貧しく、私の心は、私のうちで傷ついています。
- 23 私は、伸びていく夕日の影のように去り行き、いなごのように振り払われます。
- 24 私のひざは、断食のためによろけ、私の肉は脂肪がなく、やせ衰えています。
- 25 私はまた、彼らのそしりとなり、彼らは私を見て、その頭を振ります。
- 26 わが神、主よ。私を助けてください。あなたの恵みによって、私を救ってください。
- 27 こうして、これがあなたの手であること、主よ、あなたがそれをなされたことを彼らが知りますように。
- 28 彼らはのろいましょう。しかし、あなたは祝福してください。彼らは立ち上がると、恥を見ます。しかしあなたのしもべは喜びます。
- 29 私をなじる者が侮辱をこうむり、おのれの恥を上着として着ますように。
- 30 私は、この口をもって、大いに主に感謝します。私は多くの人々の真ん中で、賛美します。
- 31 主は貧しい者の右に立ち、死刑を宣告する者たちから、彼を救われるからです。

詩篇の中には「呪いの詩篇」と呼ばれるものが複数あり、解釈の難しさを感じるどころです。これまでも 35 篇や 69 篇で同様の傾向が見られましたが、今日の 109 篇も然りです。主イエスは「**自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい**」(マタイ 5:44) と教えておられ、パウロも「**自分で復讐してはいけません。神の怒りに任せなさい**」(ローマ 12:19) と言っています。このような「赦しの福音」に立とうとする者にとって、本篇のような箇所は混乱をきたすかもしれません。作者の無遠慮な呪詛のことばの中に福音はあるのでしょうか。

この詩篇は内容的に三つに分かれています(1～5 節、6～20 節、21～31 節)、その分類は詩人の「敵」についての言及が三人称「**複数**—**単数**—**複数**」と変化していることが目印になっています。

1～5 節では、詩人を苦しめていた人々が複数いたことが示唆されています。おそらく詩人は偽りの告発をされ、公の場で根も葉もないことを並べ立てられたのでしょう。これは一種のプロパガンダであり、誰かを陥れるために人間が使う常套手段と言えます。しかも、その人々はかつて詩人が心からの愛を注いだ人々であったというのです(「**私の愛**」4 節、5 節)。「**邪悪な口**」「**欺きの口**」「**偽りの舌**」「**憎しみのことば**」(2～3 節)と、彼らはことばの暴力でもって詩人を追い詰めていました。世の中にはどれほど真実ではないことが大衆によって信じられているのでしょうか。

6～20 節では、敵に関する人称が単数形に変わります(彼)。おそらくこれは、敵対者集団の中の代表格のことが言われているのでしょう。詩人を標的にし、取り巻きを用いて更に不利になる状況を作り出していたことが想像されます。詩人は敵対者の顔を思い浮かべ、徹底的に呪いを求めて主に祈ります。6～15 節で並べ立てられている呪詛の内容は、サタン(なじる者)が彼と一緒に立つようにというところから始まり、罪に定められ、寿命が縮まり、職が失われ、子孫や妻にまで呪いが及び、一族根絶に至り、財産は没収され、天の国籍からも名が消されるようにというものです。恐ろしい祈りです。こんな祈りをささげることが許されるのでしょうか。

ここで一つ言えることがあるとするならば、この詩人は自分の思いを赤裸々に主の御前に注ぎ出してはいるものの、自らの手では決して復讐しようとしていないということです。裁きを主の御手に委ねていうという点では、新約の思想と矛盾してはいません。また同時に、祈りにおいて「いい子」でいようとはしておらず、偽りなき自分の心を主の御前に広げています。人間の怒りの感情のすべてを受け止めてくださる主への深い信頼とも言えるのかもしれません。

16～20 節では、敵対者が単に詩人だけを苦しめたのではなく、「**悩む人**」「**貧しい人**」「**心ひしがれた者**」(16 節)という社会的弱者を虐げていたことが指摘されています。詩人の義憤とも言えましょうか。

21～31 節では、再び三人称複数形に戻ります。ここでは繰り返し救いを求める祈りがささげられています。「**私を救い出してください**」(21 節)、「**私を助けてください**」「**私を救ってください**」(26 節)。中でも、「**私の心は、私のうちで傷ついています**」(22 節)という表現は、私たちが誰かから傷つくことばを浴びせられたとき、そのまま用いることができそうです。注いできた愛情が裏切られた詩人の心は深く傷ついていたのです。そのことを本当に分かったださるのは神のみであった。人には理解しきれぬ心の思いを主は理解してくださるのです。このことのために、詩人がどれほどの苦難の祈りをささげたかが、24 節を読むと分かります。彼はふらふらになるまで断食し、肉が削げるほどまでに食べられない状態に陥っていたのです。

しかし、最後は賛美で終わります。「私は、この口をもって、大いに主に感謝します。私は多くの人々の真ん中で、賛美します」(30 節)。十分に自分の思いを主に注ぎ出した詩人は、あとは主の御手に委ねました。祈りは聞かれたことを信じたのです。その祈りに偽りがないことを、自分の心が知っていたのでしよう。

私たちも本篇を通して「祈り」を学ぶことができます。もちろん、このような祈りを人前でささげるのには注意が必要です。しかし、神との一対一の関係において、私たちは自分のすべてを受け止めてくださる主を信頼して祈ることができる。これほどまでの主との関係を詩人が築き上げていたところから、私たちもそのようになれるのだと励まされているのではないのでしょうか。